

# 書簡から見るモースと日本人との交流

木村 早霧\*

## はじめに

大森貝塚を発見し、日本の考古学の基礎を築いたエドワード・シルベスター・モース（1838-1925）。滞日中のみならず、帰国後もモースは日本の陶器や民具資料を多数収集し、米国マサチューセッツ州セーラム市にあるピーボディ・エセックス博物館（以下「PEM」）や同州ボストン市にあるボストン美術館に現在所蔵されている。モースのコレクションとして、陶器や民具資料の他にも、多くの関係文書が残っているのが特徴的である。PEMに所蔵されているEdward Sylvester Morse Papers(以下「モース文書」)は日記、書簡、研究資料、スケッチ、論文、講義ノート、出版物、新聞の切り抜きなどから構成される。文書の総数は46,000点以上で、そのうち書簡だけで12,000通以上が保存されている。主に1853年から1925年の間に家族や友人、仕事の関係者などからモースが受け取った書簡と、モースが親友のジョン・ミード・グールド（1839-1930）宛てに書いて送った書簡である。

12,000通以上残されている書簡のうち、確認できる日本人<sup>1</sup>がモースへ送った書簡の数は267通ほどに限られている。しかし書簡のやり取りはモースが三度にわたる来日時のみならず、生涯を終える1925年まで続いており、書簡を通してモースと日本人との関係を窺うことができる。送信者の近況報告はもちろんのこと、モースが帰国後に書いた日本に関する著書や、自身の長年の研究テーマである腕足類に関する論文などの原本や複製本を、モースは日本人の友人・知人に送付していたので、そのお礼を伝える書簡が残っている。また米国でも日本の陶器や民具の収集を続けたモースの収集活動や研究を手伝う書簡や、帰米後もモースの変わらない日本に関する関心の高さへの喜び、驚きを伝える書簡も、多く残されている。本稿では現在確認できるモースと日本人との書簡のやり取りを通して、モースと交流のあった日本人との関係性やモースが彼らに与えた影響などを見ていきたい。なお、あらかじめ述べるが、筆者は同地を訪れたことはない。小林淳一氏が調査研究用としてPEMから提供を受けたモース文書を元に、本稿を執筆した。

## 1 日本人からのモースへの書簡

モース文書としてPEMに保存されている資料は、“*Edward Sylvester Morse (1838-1925) Papers, 1858-*

---

\*東京都江戸東京博物館学芸員

1953, 1978-1985, 2003 ©2014, Phillips Library at the Peabody Essex Museum”にて知ることが出来る。この中で、モースが受け取った、日本人からの書簡は総勢101人から267通を数える（保存状態により判別できない資料、未分類の資料もあるが、今回それらは含まれていない）。

まず日本人がモースに書簡を送った年と、その数を以下の表1にまとめた。

【表1】日本人がモースに書簡を送付した年

1877年	3通	1887年	3通	1897年	3通	1907年	6通	1917年	4通	
1878年	5通	1888年	1通	1898年	0	1908年	3通	1918年	4通	
1879年	26通	1889年	2通	1899年	2通	1909年	2通	1919年	5通	
1880年	11通	1890年	2通	1900年	3通	1910年	7通	1920年	4通	
1881年	1通	1891年	0	1901年	3通	1911年	13通	1921年	3通	
1882年	19通	1892年	7通	1902年	3通	1912年	6通	1922年	6通	
1883年	3通	1893年	5通	1903年	1通	1913年	10通	1923年	5通	
1884年	0	1894年	4通	1904年	4通	1914年	5通	1924年	5通	
1885年	3通	1895年	1通	1905年	3通	1915年	6通	1925年	13通	
1886年	6通	1896年	1通	1906年	2通	1916年	4通	不明	29通	
									合計	267通

モースの来日時（1回目：1877年6月～11月、2回目：1878年4月～1879年9月、3回目：1882年6月～1883年2月）を中心に、日本人とモースとの書簡のやり取りが多いことが、この表からわかる。また帰米後から晩年まで、長きにわたって日本人から書簡が送られていた。

次にモースに書簡を送った日本人総勢101人について、モース文書の中にある名前と書簡のやり取りを参考に、それぞれのモースとの出会いについて、表2にまとめた。

【表2】モースとの出会い

三度のモース来日中にモースに会った日本人	51人
米国でモースに会った日本人	36人
不明	14人
合計	101人

上記の表から、モース来日時に日本で出会った人からの書簡が全体の半数を占めることがわかった。なお、101人の職業・所属先のうち、東京大学関係者（教授、学生など）が28人と一番多い。他は他大学・研究機関の学者、政治家、実業家、米国への留学生や旅行者、文部省や在米大使館職員などで、中には宮家からの書簡も含まれていた。日本国内外を問わず、モースの交友関係の広さがわかる。

次にモースと特に関係が深く、書簡のやり取りの多かった日本人からの書簡と、彼らの足跡を取り上げる。

## 2 書簡の中で、特にやり取りが多かった竹中成憲、宮岡恒次郎兄弟

竹中成憲（1862-1925）、宮岡恒次郎（1865-1943）兄弟はモースやアーネスト・フェノロサ（1853-1908）が来日中に通訳や助手を務めた人物で、モースが帰米後も、長きにわたって交流が続いた形跡が、書簡からわかる。なかでも弟の宮岡が送った書簡は、確認できるだけで36通と日本人の中で一番多く、最後の書簡は1925年11月27日付となっている。モースが翌月20日に息を引き取る直前まで、2人の交友関係は続いていた。

1878年、サンフランシスコからの日本へ向かう船上でモースと知り合いになった高嶺秀夫（1854-1910）を通じて、宮岡恒次郎はモースと出会った。当時宮岡は12歳の東京大学予備門の生徒で、のちに東京高等師範学校長となる高嶺の家の下宿していた。英語が流暢だった宮岡は加賀屋敷五番館に住むモース宅をたびたび訪れ、モース一家とも仲良くなり、実の子のように可愛がられた<sup>2</sup>。宮岡は1887年に東京大学法学部を卒業後、外務省に入省し、途中、米国やドイツに赴任した。1909年に退官後、東京で弁護士事務所を開業し、国際法や特許権に強い弁護士として活動の場を広げた<sup>3</sup>。また法律関係の著書の出版や、特別特使としてカーネギー国際平和財団と関係する仕事をしたり、東京ロータリークラブ設立メンバーの一人になるなど、国内外で活躍した。

モースと宮岡の書簡のやり取りをみると、外務省時代の米国駐在時や出張の際、機会があればモースに会う約束をしている（例えば1892年8月11日付や1907年3月28日付の書簡）。また宮岡は子供の結婚や孫の誕生、自身の転職、後述するモースの教え子の佐々木忠次郎や岩川友太郎、石川千代松と会い、モースの話が出たことなど、家族や友人の近況報告をモースにしている。1917年のやり取りでは、モースが“*Japan Day by Day*”を出版したことを喜び、本を東京大学図書館に置いたことを伝え、日本でも本を売るようにお願いをした。1923年の関東大震災後には、地震により自身の弁護士事務所が崩壊、東京大学図書館が焼失したことを、また1924年にモースが勲二等瑞宝章を叙勲した際には、手書きのイラストを添えて、記章のつけ方や周囲の反応などを伝えた。1925年の兄竹中成憲の死去を伝えた書簡では、モースの写真が竹中家の家宝になるだろうと言い、同年に受け取ったモースの最新の写真を生涯大切にすると伝えた。

宮岡は外交官から弁護士時代に至るまで、自身の軸となった国際感覚は加賀屋敷で始まった。それにはモースが大きく寄与しており、モースには大変感謝していると1915年1月28日付や1924年1月11日付、1925年5月付の書簡の中で、何度も述べている。モースとの出会いが、宮岡の人生に大きな影響を与えたようだ。

宮岡の兄、竹中成憲は、東京外国語学校を経て1880年に東京大学医学部に入学した<sup>4</sup>。卒業後軍医を経て1905年に佐渡に渡り、竹中医院を開業した。竹中が送った1879年12月8日付書簡では、医学部の受験に失敗し、来年に向けて頑張る決意を表明している。大学入学後の1880年8月の書簡では、夏休みは川越の叔父の家で過ごすことや、同年12月付書簡では試験や授業科目のことを伝え、受験生や大学生当時の素直な気持ちをモースに伝えた。モースは竹中について、「（収集旅行の際は）いつも私に同行し、集まったすべての物の日本名を入念に確認するのに功績があった。彼はまた、家庭で使用される用品

や衣類をたくさん寄付した。」と述べている<sup>5</sup>。1882年の大学卒業後、結婚により名前を幼名「八太郎」から「成憲」に変えた際には、古い名前のほうの印鑑を送るので、興味があれば博物館においてほしいと書簡に書いている（日付の記載なし）。弟の宮岡と共に、モースの娘と息子の遊び仲間だった竹中は、モースの子供たちを気にかけてメッセージをモースへの書簡に何度も追記し、また子供たちとの書簡のやり取りが継続していることを、モースに伝えている。

1886年5月14日付書簡では、モース著の“*Japanese Homes and their Surroundings*”（『日本のすまい』）が手元に届いたことへのお礼を伝え、「この本はとても素敵な本です。ちょうど今、私の家の前で大工が小さな家を建てているので、（本に掲載されている、モース自筆の）イラストを彼らに見せたら、驚いていました。（中略）私の多くの友人がこの本を読みがたがっているので、彼らにこの本を貸してあげようと思います。」と書いている。また書簡の最後で竹中は、大学の授業で忙しいと述べた後に、「あまり働きすぎないでくださいね、心配しております。」とモースを気遣う言葉で締めている。新潟・佐渡へと移住後も、竹中からの絵葉書や年賀状がモースのもとに届いている。1920年2月16日付の葉書は「Dear Papa.」から始まり、佐渡の居住町の消防組頭となり、消防団の半纏のようなものを着た竹中の写真が貼られている。長年離れていても、竹中はモースを父のように慕っていたのだろう。

### 3 東京大学関係者など、日本でモースと出会った人びと

次に、東京大学の教職員やモースの教え子などに焦点をあてていきたい。

#### (1) 教職員

書簡の中には、モースが初来日した1877年に東京大学の初代総理だった加藤弘之（1836-1916）や、1877年6月19日に汽車で横浜から東京に向かったモースを終点の新橋駅で出迎え、東京大学の動物学教授の就任を打診した、当時、東京大学文学部教授の外山正一（1848-1900）、後に東京大学動物学教室の教授に就任した箕作佳吉（1858-1909）や五島清太郎（1867-1935）、渡瀬庄三郎（1862-1929）、谷津直秀（1877-1947）のほか、東京大学職員の書簡が残されている。

加藤はモース来日時を中心に書簡を送っている。例えば東京大学に政治学・物理学の教授を推薦してくれたことへの感謝を伝える書簡（1878年11月付）や、大森貝塚に関する論文を受領したこと、そして東京大学の任期が満了になったモースへの感謝を伝える書簡（1879年8月付）が送られている。また、モース3回目の来日時にはお雇い外国人教授の送別会へのお誘いの書簡（1882年6月8日付）を送り、モースの東京大学への支援に感謝を伝えるために、東京大学から大和錦一卷を送る（1882年12月28日付）など、加藤からの書簡には、モースへの感謝の意を伝える書簡が多い。

モースは初代東京大学動物学教授を務めた後、後任としてチャールズ・オーティス・ホイットマン（1842-1910）を推薦した。その後、3代目としてモースは米国ジョーンズ・ホプキンズ大学留学中で、モースの師でもあるルイ・アガシー（1807-1873）の元で学び、モースと兄弟弟子であった箕作佳吉（専攻は動物学）に就任を打診した。しかし箕作は1880年5月21日付書簡で、ドイツ留学の希望があること、

そして若い駆け出しの科学者である自分の能力には、合わない地位であることを理由に、モースの打診を一度断っている。

しかし結局、箕作は応諾し、翌年に帰国して動物学教室の第3代教授に着任した。モースが在任中に設立した「東京大学生物学会」は当時すでに衰退しかかっていたが、1882年に箕作が会頭になり、名称を「東京生物学会」と改め、その再建を図った（モースは名誉会員に推薦された<sup>6</sup>）。また1886年に三崎臨海実験所を設立し、そこから多くの人材と研究成果を輩出し、東京大学動物学教室と日本の動物学の発展に深く寄与した。

モース3回目の来日時、モースに代わって人形購入の仲介交渉や、衣装などの人形製作の調整役を引き受けていた箕作は、値段・数量交渉、製作の経過をモースに報告し、まだ買入れる意思があるのかどうか、尋ねた書簡を送っている（1882年12月6日付書簡）。1883年1月29日付書簡では、人形師への支払いが終了したことを伝え、書簡と共に領収書も送っている。そして火事による人形への被害を避けるため、人形が手元に届いたらできるだけ安全な場所に人形を置くことを薦めている<sup>7</sup>。

渡瀬庄三郎は東京大学予備門、札幌農学校を経て、1884年に東京大学動物学教室に入学、第3代教授だった箕作佳吉に師事した。その後、ジョンズ・ホプキンス大学でアガシーの大学院学生だったウィリアム・キース・ブルックス（1848-1908）の元に留学した（その際、渡瀬は箕作からモースへの紹介状を書いてもらった<sup>8</sup>）。のちにシカゴ大学で教鞭をとった渡瀬は、1899年に帰国する際、モースに感謝の意と、日本での新しい住所は東京大学動物学教室と伝え、第5代動物学教授に就任した（専門は細胞学、組織学）。その後もモースとの関係は続き、1913年と1920年には、モースが執筆した貝類に関する論文を送付してくれたことへの、感謝の気持ちを伝えた書簡がモースのもとに届いている。

また農芸化学者の古在由直（1864-1934）は東京帝国大学の総長だった1922年6月に、モースの勲二等瑞宝章授与を知らせ、別途、外務省より記章が送られると書簡を通じて伝えた。そしてその中で、モースの1877～79年来日時動物学の日本への紹介、西洋文化の導入や日本の科学の発展に寄与したことなどの功績を称えた。その後、1923年12月5日付で送った書簡で古在は、関東大震災による東京帝国大学および図書館の被害の様子を以下のように伝えた（日本語訳は筆者による）。なお古在は関東大震災で大きな被害に遭った大学の復興事業を先頭に立って実施した人物である<sup>17</sup>。

エドワード・S・モース博士殿

宮岡氏からの情報によると、あなたは最近、外科手術を受けられたとのことですが、どうかお体に気をつけて、一日も早く回復されることを心より願っております。

また宮岡氏より、この度の震災で本学がどのような状況にあるのか、あなたが心配されていると聞きましたので、ご報告いたします。残念ながら、地震と火災による本学の被害は甚大で、文学部、経済学部、大学図書館のすべてが焼失しました。また、焼失を免れた建物であっても、大きな揺れに見舞われ、修復の見込みがないものもあり、現状への対応が急務であることに加えて、復旧という重大な課題に直面しています。

大学図書館の損失は、我々にとって最も深刻な打撃の一つであり、長い年月と努力を要して収集された約70万冊の書籍が一瞬にして灰燼に帰してしまいました。（中略）大学の教職員と学生の死

傷者については、文学部の講師と無給の助手、農学部の助教と無給の助手、それに10人ほどの学生の死亡が報告されています。災厄の重大さを考えれば、心配していたよりもはるかに少ない数でございます。

この場をお借りして、貴国政府と国民からの心のこもったお気持ち、支援活動につきまして、全日本国民が大変感謝していることをお伝えいたします。

敬具

Y. Kozai

モースは1923年9月の震災後、すぐに新聞を通してその惨事を知った。子供たちの同意のもと、モースが自身の蔵書を東京大学図書館に死後、寄贈するよう遺書に書き替えた話は有名であるが、古在や宮岡から受け取った関東大震災の被災に関する書簡は、その意思をさらに後押ししたのかもしれない。モース没後、遺言通りに送られてきた書物は12,000冊（箱数でいうと69箱）に達したという<sup>18</sup>。

## (2) 動物学教室の教え子たち

次にモースが東京大学在職中の教え子たちに注目する。モースの正式な弟子としてあげられるのが、1877年9月に生物学科2年に進学してきた松浦佐用彦（1857-1877）と佐々木忠次郎（忠二郎）（1857-1935）、翌1878年に生物学科に進学してきた飯島魁（1861-1921）と岩川友太郎（1855-1933）の4人である。この他にも、飯島と岩川の一学年下で教室に出入りしていた石川千代松（1860-1935）も事実上の弟子として、モースと深い関係を築いた。

モースにとって最初の学生の一人で、1877年の江の島での魚介類の底引きや、大森貝塚の発掘調査、1878年の蝦夷地探検旅行に同行した佐々木は、1881年に東京大学生物学科の第1回生として卒業した後、駒場農学校助教授、教授を経て東京大学農学部教授となり、昆虫学や養蚕学を担当、昆虫学者として活躍した<sup>9</sup>。

佐々木は1879年から1880年にかけて送った書簡を通じて、モース帰国後に行なった陸平貝塚や島津貝塚など、貝塚の発掘調査について報告している<sup>10</sup>。1910年にボストンでモースと再会した翌日には、すぐにそのお礼の書簡を書いた。1925年9月にはモースの米寿のお祝いの言葉と共に、寿帽（頭巾）とその被り方を描いた絵を添えて送った。その後佐々木は、寿帽を受け取ったモースから、「言葉では言い表せないほど喜んでいる」と書かれたお礼の書簡を受け取った（1925年10月23日付書簡）<sup>11</sup>。

開成学校時代に東京大学で開催されたモースの講演を聴いて、動物学専攻を決めた岩川は、モース、そして後任のホイットマンの薫陶を受け、貝類学を研究した。1881年に生物学科を卒業後は、東京高等師範学校（のちの東京教育大学、筑波大学）教授、女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）教授を務めた<sup>12</sup>。

1903年4月1日付の岩川からモース宛の書簡では、モースが送ってくれたボストン学会の回顧録のお礼と共に、女子高等師範学校で自然史を教えながら、東京帝室博物館（現・東京国立博物館）で軟体動物の研究を続けていて、全国各地で淡水産の貝類を収集していることを伝えている。また1912年11月15日付書簡では、学校（おそらく女子高等師範学校）で動物学を教える傍ら、引き続き東京帝室博物館で

日本の軟体動物の研究をしていて、すでに1300種を超える標本を収集したことを伝えた。

石川はしばしばモースの通訳を務め、1879年のモースの講義録を筆記・和訳した『動物進化論』を発行し、日本で初めて進化論を体系的に紹介した人物である。東京大学を卒業すると、すぐに同大学動物学教室の准教授となり、ドイツ留学から帰国した1889年以降、帝国大学の農科大学助教授（翌年には教授）となった。1924年に退職するまでその職を務め、日本の昆虫学、水産学の礎を築いた。また上野動物園の運営にも20年近く携わり、石川は上野動物園の育ての親と呼ばれている<sup>13</sup>。

1887年に英国で開催された科学に関する学会にて、石川はドイツ留学時に師事したアウグスト・ワイズマン（1834-1914）を通して、モースから伝言を受け取った<sup>14</sup>。1909年にセーラムにあるモースの自宅を石川が訪問した際には、モースが最近書いた“*Mars and Mystery*”の一部を受け取った。1925年9月3日付書簡では、88歳になるモースの長寿のお祝いの言葉とともに、長年の感謝の証として翌年の『東洋学芸雑誌』新年号を「モース教授特別号」として発行する予定だと伝えた。そして「モース教授特別号」刊行にあたり、一言モースより言葉を頂戴したいことと、モースの身内の誰かに、モースの幼少期からの略歴を書いてほしいとお願いした。

モースの死後、石川はセーラムのハーモニイ・グローブ墓地にあるモースの墓に詣でた<sup>15</sup>。石川の息子、石川欣一（1898-1959、東京大学英文科卒業）はモースの“Japan Day by Day”（1917年刊行）の邦訳版『日本その日その日』を1929年に出版した人物であるが、彼自身の米国留学中の一時期、モースの自宅に同居していたという<sup>16</sup>。欣一からはモースに宛てた絵葉書が残っていて（一通は1920年に送ったクリスマスカード、もう一通は1922年にパリから送った絵葉書）、親子でモースと親交があった。千代松が送った1925年9月3日付書簡の中で、欣一が1924年に結婚し後に女兒が誕生したことを報告している。

以上のように東京大学関係者の書簡を見てきた。モースの来日当初から、晩年に至るまで、モースと東京大学関係者との関係が長く続いていたことが、彼らの書簡からわかった。

### （3）その他

東京大学関係者以外では、1881年に東京教育博物館（現・国立科学博物館）館長に就任した手島精一（1849-1918）や平瀬興一郎（1859-1925）（日本の貝類学研究の第一人者）など、おそらくモースが三度の来日中に出会った日本人からの書簡も残されている。

手島が送った1882年10月5日付書簡では、ピーボディ科学アカデミーから東京教育博物館宛てにイシサンゴ、アカデミー発行の回顧録を送ってくれたことへのお礼が書かれている。また手島はそのお返しとして、東京教育博物館から宝石商、陶工彫刻師、漁師や樽屋の道具一式やスケッチを寄贈し、それらを入れた箱が手元に届いているか、確認している書簡を送っている。1886年にはモース著“*Japanese Homes and their Surroundings*”を送ってくれたことへのお礼、ならびにその本を図書館に置いたことを伝え、また米国科学振興協会会長の就任のお祝いの言葉も伝えた。手島がシカゴ万国博覧会への参加のために設けられた農商務省の臨時博覧会事務局事務官としてシカゴを訪れた1893年には、モースに2通の書簡を送っている。そのうち8月16日付書簡で、8月22日夜8時より日本茶室で開催予定のモースによる講演会について、その登壇のお礼を先に伝えている。1901年8月31日付書簡では、モースが送付し

た“*Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery*”（『日本陶器目録』）の出版の祝福と、出版に向けたモースの多大なる労力への賞賛を伝えた一方で、モースが東京大学教授時代の教授仲間、外山や植物学教授の矢田部良吉（1851-1899）の死去を伝えた。

#### 4 米国内でモースと交流があった、留学生・在米邦人

当時の日本からの留学生には、有力者や資産家の子息たちが多かった。学都ボストンには名門校が集中しているので、近所にいるモースには、紹介状を持って訪ねる若者たちが多かったという。モースは自宅を訪ねてくる日本人を必ず歓迎し、常に「Chikubano tomo（竹馬の友）」という言葉を送り出して歓迎したそう<sup>19</sup>。後に述べる松本文恭の回顧録には、「ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、ボストン大学、ブラウン大学などに入学した連中はみなモース博士を一回か二回は訪ねるが、変人だから近寄らない方がよいとって敬遠した。」<sup>20</sup>と書かれているが、留学中にモースに会い、彼のホスピタリティに感激してそのお礼を伝える書簡が数々残されている。たとえば米国で活躍した歴史学者でイェール大学教授の朝河貫一（1873-1948）や外交官の小村壽太郎（1855-1911）である。

その中には、福澤諭吉（1835-1901）の次男で、1883年に米国留学した捨次郎（1865-1926）の書簡も含まれている。兄の一太郎（1863-1938）と共にマサチューセッツ工科大学へ入学する際に、モースに世話になり、たびたびモースの家を訪れたという（もともとは諭吉が来日中のモースと親交があった。捨次郎や慶應義塾大学の教え子が、モースの世話になっていることへのお礼を述べ、お仕事の邪魔にならないか、少年のことゆえ気が付くことがあれば、ご忠告いただきたいと、モースにしたためた諭吉の書簡も残されている（1884年8月13日付書簡））。捨次郎は鉄道工学を学び、帰国後は山陽電鉄株式会社に技師として入社した。諭吉の死後には時事新報社の経営を引き継ぎ、社長となった。捨次郎からの1909年12月2日付書簡では「この書簡を受け取ったら、きっとあなたは驚くことでしょう。私がおあなたに書簡を書く喜びを感じるの、とても久しぶりです。あなたの寛大さに免じて、私の長い沈黙を許してください。」という文章で始まっている。そして弟の大四郎（諭吉の四男）が米国へ留学したが、友達がなかなかできず、ホームシックのようで母親と心配している。ボストンで学生生活を送っていたときに、モースやモース一家から受けた多くの親切を思い出した捨次郎は、弟にモースの連絡先を伝え、モースと会って話をするように伝えたといい、モースには彼の話の聞いたり、アドバイスをしてくれないかとお願いした。

1881年に札幌農学校を卒業後、1883年に東京大学に入学した新渡戸稲造（1862-1933）は、翌年退学して、1884年にジョンズ・ホプキンス大学に入学、農業経済学などを学んだ。渡米の際、東京大学の外山が新渡戸にモースへの紹介状を書いて渡した<sup>21</sup>。どうやらその時、モースと新渡戸は会えずじまいだったようだが、外山からもらった紹介状を、新渡戸は15年以上持ち続けていたようだ。療養のため、フィラデルフィア出身の新渡戸夫人の故郷に滞在中に書いた『武士道』について、新渡戸は1900年1月2日付書簡で、『武士道』が米国の読者にも受け入れられるのか、率直な意見をモースに求めており、改訂版の参考にしたいと書いた。その後『武士道』を読んだモースは1月10日にボストン・ヘラルド紙に書評を

投稿。新渡戸はモースからの返信（1月7日付）とボストン・ヘラルド紙へのモースの友好的な書評の投稿のお礼を伝える書簡をすぐに送った（1月12日付）。

新渡戸夫人のメアリーが1912年2月12日付にモースに送った書簡では、新渡戸が1912年内の渡米中にモースに会えるかどうか、伺っている様子がわかり、新渡戸とモースの交流はこの年になっても続いていた。

モースは帰国後も日本の陶器研究や民具資料の収集を続けたこともあり、米国で日本美術品の商売を行っていた執行弘道（1853-1927）や松本文恭（1867-1940）、山中商店などとのやり取り、売買の様子が書簡の中に残っている。1901年に出版した“*Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery*”の序文の中でモースは「執行氏と松木氏には大変世話になり、ここに感謝の意を表す。執行氏は多くの素性不明な作品を同定する手助けをしてくれ、連日にわたりコレクションをよく精査してくれた。松木氏は私（モース）と出会ったことで陶器に興味を持ち、知識を得たがことがきっかけとなり、その後、頻繁に日本を訪れては、重要な品々を陶工から入手したり、わかりにくい銘印を巧みに解説してくれたりした。」<sup>22</sup>と彼らの貢献について書いている。

執行は大学南高に入学、米国留学後に外務省入省（1874年）。三井物産を経て1880年に日本の工芸輸出振興を目的とする起立工商会社に転職、その後ニューヨーク支店の支店長を務め<sup>23</sup>、工芸品だけでなく、浮世絵や陶磁器、掛物といった日本の美の紹介に力を注いだ。1883年の米国ボストン万国産業博覧会にビジネスに出展者座長代行として関わって以降、数々の博覧会に参加、1893年のシカゴ万国博覧会では、モース、フェノロサ、ジョン・ラファージ（1835-1910）らと共に、日本美術部門の万国審査委員を務めた<sup>24</sup>。執行からモースへの書簡は13通確認できる。その多くが陶器に関するもので、ボストンに行った折にはモースに会いたい、また新しく手に入った陶器があるので、こちらに見に来てほしいとモースに伝えている。1913年9月27日付書簡では、“*Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery*”の補遺版を受領し、それを夢中になって読んだこと、モースの偉大な仕事への微少な手伝いにもかかわらず、自分に大変感謝してくれたことへのお礼を述べている。執行は1897年に1900年パリ万国博覧会参加業務担当のため帰国、その後も、近代日本美術の発展に尽力した<sup>25</sup>。

一方、松木は1888年の21歳で渡米した際に、モースの近所に下宿しながらモース夫妻が後見人となって、セーラム高等学校に入学した。1890年にセーラムに日本の雑貨などを扱う店を始め、やがて日本や中国の美術品、骨董品を多数輸入し始めた。米国にもジャポニスムの波が押し寄せていた背景も相まって、松木の商売は順調に収益を伸ばし、1893年にはボストンにも店を出した<sup>26</sup>。松木は高校卒業後の1893年、高校の同級生と結婚し、モースから土地を購入して和風の家を建てた<sup>27</sup>。

貿易商として日米を毎年往復する機会を利用し、松木は日本各地の窯元を訪ね歩き、窯元や不明の捺印の調査を行った。その調査過程や珍しい日本の骨董品が手に入ったことを、松木がモースに伝えた書簡がいくつか残されている（1890年3月付、1892年3月13日付、1893年2月27日付書簡など）。また掛け物の買い付けにあたり、モースに借金の相談をした書簡も残されている（日付の掲載なし）。やがて借金返済といった金銭問題や、松木が仕入れた日本の美術・骨董品の信用度の失墜により、松木の商売は行き詰まっていき、最終的には店をたたんで帰国した<sup>28</sup>。

## おわりに

モースの日本滞在は合計3回、延べ2年半ほどと、決して長くはない。しかしPEMに「モース文書」として保存されている、モースが日本人から受け取った書簡を読み解くと、モースからの送付物やおもてなしに感謝する気持ちを伝えた書簡や、自身の仕事や家族、モースと共通の友人・知人の近況報告を伝えた書簡など、モースと日本人との長年にわたる、生き生きとした交流が浮き上がってきた。また書簡を送った日本人の足跡をたどってみると、モースの東京大学動物学教授時代の教え子との関係は歴代に引き継がれた上、研究を続けて日本の動物学や生物学などの先駆者になった者、海外を舞台に活躍の場を広げる者もいた。彼らの活躍の裏には、モースから受けた影響も少なからずあるだろうし、彼らからの近況報告を書簡を通じて聞いたモースは、さぞかし嬉しかったことだろう。

今回は日本人が送った書簡に限った考察となったが、モース自筆の書簡や家族、親友といったモースに近い人々からの書簡などにも範囲を広げることで、モースと日本、日本人との関係がより一層わかるだろう。次の課題としたい。

### 【註】

- 1 その中には在米日本大使館やJapan Society、日本企業からの書簡を含む。
- 2 磯野直秀『モースその日その日 ある御雇教師と近代日本』、有隣堂、1987年、P159
- 3 中西道子『モースのスケッチブック』（新異国叢書 第3輯）、雄松堂出版、2002年、P551
- 4 磯野、前掲書、P257
- 5 守屋毅編『共同研究 モースと日本』小学館、1988年、P361
- 6 磯野、前掲書、P201-202
- 7 日本ではほとんど残っていない生き人形はPEMに保存されている。それらは箕作の仲介により、購入したものである。生き人形に関しては、小林淳一『海を渡った生き人形—ペリー以前以後の日米交流』朝日新聞社 1999年を参照のこと。
- 8 中西、前掲書、P434
- 9 磯野、前掲書、P172
- 10 守屋、前掲書、P268
- 11 磯野、前掲書、P318
- 12 磯野、前掲書、P176-177
- 13 岸井貫「二つの貝塚碑の人びと—モース博士と東大予備門生達—」『品川歴史館紀要』第12号、1997年3月
- 14 エドワード・シルベスター・モース著、石川欣一訳（1970）『日本その日その日1』平凡社東洋文庫、1970年、P34
- 15 ドロシー・ウェイマン著、蜷川正親訳『エドワード・シルヴェスター・モース 下巻』中央公論美術出版、1976年、P244
- 16 磯野、前掲書、P315

- 17 古在由直－図書館再建－東京大学総合図書館公式サイトより [https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/about/history/history\\_0/history\\_2](https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/about/history/history_0/history_2)（参照：2021年11月16日）
- 18 磯野、前掲書、P315
- 19 佐々木忠次郎「モールス先生追悼号 日本動物学の恩人モールス先生」『東洋学雑誌』1926年
- 20 中西、前掲書、P443
- 21 中西、前掲書、P483
- 22 Edward Sylvester Morse, “*Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery*,” Museum of Fine Arts, Boston; Riverside Press, 1901
- 23 執行一平 執行弘道年譜 平成24年補訂『畠山公開シンポジウム』第2号、ジャポニスム学会、2013年
- 24 大久保美春「エドワード・モース、フランク・ロイド・ライトと執行弘道」『畠山公開シンポジウム』第2号、ジャポニスム学会、2013年
- 25 岡部昌幸「執行弘道と日米における美術振興の発展」『畠山公開シンポジウム』第2号、ジャポニスム学会、2013年
- 26 福田敬子「『日本』をプロデュースした男：美術商人松本文恭の「米国その日その日」」『青山学院大学文学部紀要』60、2018年、P63-82
- 27 中西、前掲書、P442
- 28 福田、前掲書、P64